



Title	鈴木敏夫教授について
Author(s)	大櫃, 敬史; OBITSU, Takashi
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 101, 49-53
Issue Date	2007-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20485
Type	departmental bulletin paper
File Information	101_49-53.pdf



鈴木敏夫教授について

大 櫃 敬 史*

Profile of professor Toshio Suzuki

Takashi OBITSU

鈴木敏夫教授は、1972年（昭和47年）に北海道大学に赴任されて以来34年間の永きに渡り誠実で温かい態度で学生・院生に接し、惜しみない努力を払って来られた。全学教育課程では、実技科目として旧教養部における必修授業科目「体育実技」Ⅰ、Ⅱをまた全学教育に改称してからは「体育学」A及びBを担当して来られた。また講義科目としては、これまで総合講義（「現代生活とスポーツ」）や一般教育演習等を、平成18年からは新たに「体育学」Bを加えて担当し、体育やスポーツが抱える今日の諸課題を学生に講義されてきた。

一方、学部専門教育課程では、「体育史」「原書講読」「基礎演習」「専門演習」などを中心に担当されて来た。殊に、「原書講読」は、先生が最も得意とされた領域であり、隔年で開講される講義には意欲ある受講生が集まり、難解な古文書と格闘する姿をよく目にすることがあった。大学院教育学研究科においては、「健康スポーツ科学」「体育計画基礎論」「同特論」「健康スポーツ科学調査実験」「スポーツ文化論」を担当して来られた。これらの講義・演習・実験・研究指導を通じて、多くの学生・院生に薫陶を及ぼし教育者として大きな足跡を残された。

鈴木教授の専門分野は、体育史研究であり、長年にわたり「日本の近代における学校及び社会体育（スポーツ）の成立・展開に関する歴史的研究」をテーマに、綿密な資料発掘に基づいた実証的研究を進めて来られた。これまでの研究主題を要約すれば、凡そ以下の通りである。

(1) 近代体育の成立過程

日本の近代体育の成立史研究は、先生が研究の道に進まれた後、最も力点を置いて取り組んで来られた研究課題であった。日本の近代体育の成立が「西欧化」という外発的要因によってなされたという学会の通説にとらわれず、逆にこれまで顧慮されてこなかった日本の近代体育を成立させる内発的基盤の問題に関心を抱き、19世紀の特に藩校を中心として近代化し、明治期とともに近代体育として成立するまでの日本体育の発展過程を豊富な資料によって実証的に検討されてきた。代表的なものを挙げると以下の様である。(1) 鈴木敏夫（1988）近代学校における武術採用論－阪谷素（しろし）の場合。日本武道学研究，島津書房。(2) 鈴木敏夫（1976）文部省訓令第6号と北海道の学校体育，体育学研究，20（4）。

(2) 近代体育の展開過程

ここでは、国家主義教育の展開とともに国民体育の振興論が台頭する1890年代から第一次世界大戦後における社会教育の必要性が高まる1920年代までの体育・スポーツをめぐる諸実相が、教育の思想・体制・運動などの歴史的条件との関連の中で、どの様な歴史的役割を果たしたかについて検討された。この時期に、体操教育の普及と相俟って、国家レベルで注目され

* 北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座助教授（体育計画〈体育史〉研究グループ）

たのは、西欧の近代スポーツであった。日本における近代スポーツは、既に1870年代に欧米から受容され、高等教育機関をその発展基盤として展開したところに基本的特徴があった。特に高等・中等学校にスポーツが定着する根幹に、学生の自治組織たる校友会とその傘下に派生した運動部の存在を挙げている。

この時期における体育・スポーツ関係資料の収集と同時に、関連する行政資料として公布された勅令・政令・訓令・通達に関する文書を蒐集し、合わせてスポーツに関する帝国議会議事録、各種の運動審議会議事録などの体系的蒐集を行ってこられた。これらの研究成果は、学術論文や図書などとして刊行されている。(1) 鈴木敏夫(1985) 高等教育機関における体育・スポーツの発達に関する比較的研究. 体育史研究, 2. (2) 鈴木敏夫(1987) 旧制高等学校におけるスポーツの成立と発展過程に関する実証研究. 北海道体育学研究, 20.

(3) 日米体育・スポーツ交流の比較史研究

1990年代後半より国際的研究交流の一つとして、米国マサチューセッツ州立大学の体育史研究グループとの間で「日米体育・スポーツ交流の比較史研究」が開始された。これまでの体育史研究における札幌農学校の研究は、日本の運動会の原型としての「遊戯会」、森文政期以降に学校体育の内容を規定していく「兵式体操」の先駆的事例として扱われてきたが、いずれもその実相については実証的に明らかにされていないままであった。先生が、これまでに取り組んで来られた研究課題を進める予備調査によれば、遊戯会やミリタリー・ドリルは実は農学校の体育の内容の一部であり、同校ではマサチューセッツ農科大学をモデルとした包括的な体育教育を実践させる構想が予定されていたことである。今後、札幌農学校の体育関係諸資料の体系的収集をもとに、さらにその範囲をアメリカまで拡大させながら、「近代日本体育史における札幌農学校の研究」として、その成果を世に問うべく更に一層精力的に研究を進められている。これまでに纏められた研究成果は、以下の通りである。(1) 鈴木敏夫(1996) 札幌農学校におけるマサチューセッツ農科大学方式の体育の受容. マサチューセッツ州立大学ボストン校看護学会会報, 1996. (2) 鈴木敏夫(2003) 札幌農学校のミリタリー・ドリル. 体育史研究, 17.

学内にあっては、全学及び学部内各種委員会委員を歴任された他、社会交流委員長、予算委員長、健康体育学運営委員長などを併任し、学部、講座の円滑な運営に尽力された。また課外活動の指導にも大変熱心に取り組まれて、北海道大学ソフトテニス部顧問を永年務め、学生時代の自らの経験を存分に生かし、競技力の向上はもとより、より人間性豊かな学生を育てる立場から指導にあたってこられた。

学外における活動に目を転じると、永年、北海道体育学会の事務局を務められ、学会発展の基礎づくりに多に貢献して来られた。また同学会の理事長及び会長を歴任された他、日本体育学会においては、理事・評議員を永年に渡って務め、道内外の体育界の発展に寄与するところが大きかった。

鈴木教授は、全学教育では主として「テニス」「バドミントン」「卓球」「集中講義スキー」を担当され、常に率先して学生に模範を示して、動きのポイントを分り易く指導する授業を展開されてきた。全学教育を常に最優先され、「教師はいつも学生たちに(身を持って)、示範がしめせなければいけない。」これがいつも先生の口癖であったことを今、懐かしく思い返している。

先生と私の付き合いは実に19年に及んでいる。いつも冷静で、広い心を持ち、決して怒らず、取組んだことは最後まで遣り通す、指導熱心…そんな言葉がピッタリの先生でありました。私たちは、常日頃の先生の教育・研究活動の中から沢山のことを学ばせて頂きました。

長い間本当にお疲れ様でした。そして有難うございました。今年の後半になって体調を崩されましたが、どうかゆっくりと養生をされて、いつもの元気で澁刺とした先生の姿に早く戻って頂きたいと願っています。

北大を去られた後も、学生・院生そして私たち教員に対して、どうか温かい眼差しでご指導を頂きます様に、また先生のライフワークである「近代日本体育史における札幌農学校の研究」が更なる発展を遂げます様に心から祈念する次第です。

主要業績目録

(1) 著 書

著書・学術 論文の名称	単著 共著	発行または 発表年月日	発行所・発表 雑誌等の名称
『近代体育スポーツ年表』 1840年～1887年（日本担当）	共	1873. 10	大修館書店
『国際体育スポーツ史東京セミナー論集』 江戸後期における農民の余暇と遊戯	共	1978. 1	図書印刷
『体育史の探求』 初期の札幌農学校遊戯会について	共	1982. 3	図書印刷
『体育セミナー講義・体育史』	共	1986. 3	学術図書
『新版 近代体育スポーツ年表』	共	1986. 3	大修館書店
『日本武道学研究』 近代学校における武術採用論～阪谷 素（しろし）の場合	共	1988. 3	島津書房
『北海道体育スポーツ文献目録Ⅰ』 体育史編	共	1989. 10	北大印刷
『北海道体育スポーツ年表』	共	1990. 11	北大印刷
『現代学校体育辞典』	共	1993. 8	第一法規
『体育・スポーツ史研究の展望』 明治期における地域スポーツ組織の 成立～北海道端艇会を中心に	共	1996. 5	不昧堂出版
『新札幌市史・通史五（上）』 市民スポーツの成立	共	2002. 3	大日本印刷
『北大百二十五年史 通史編』 大学院教育学研究科・教育学部	共	2003. 12	岩崎書店

(2) 論 文

佐藤中陵の養生観	単	1970. 10	『北海道体育学研究』 第6巻
アイヌ絵に見る民族的遊戯について	単	1971. 3	『北海道体育学研究』 第7巻

幼児体育に関する研究（1）幼稚園に おける幼児の運動測定とその活用	単	1971. 10	文化女子大学研究紀要 第3号
日本のスポーツと文化	単	1971. 12	室蘭短期大学評論 第1号
幼児体育に関する研究 室蘭市内公園の 遊具配置状況と問題点	単	1972. 10	文化女子大学紀要 第4号
スポーツを愛する心	単	1972. 11	室蘭短期大学評論 第2号
江戸後期における農民の余暇と遊戯	単	1972. 11	『体育学研究』 第16巻4号
幕末西洋衛生書（健全学）について	単	1972. 12	『北海道体育学研究』 第8巻
松前教育会雑誌（明治20・21）における 体育振興に関する主張	単	1973. 10	『北海道体育学研究』 第9巻
民衆不在の近代スポーツの始まり	単	1973. 11	民主スポーツ3号
江戸時代における養生書の研究～身体運 動の養生的価値をめぐって	単	1973. 11	北海道大学教育学部紀要 第22号
地方体育の紹介・北海道（1）	単	1975. 12	『体育の科学』第25巻 4号
地方体育の紹介・北海道（2）	共	1976. 11	『体育の科学』第26巻 4号
文部省訓令第6号と北海道の学校体育	単	1976. 11	『体育学研究』第20巻 第4号
論説「体育改良の一法案」について～ 明治10年代の体操科教育への提起	単	1977. 3	北海道大学教育学部紀要 第27号
19世紀における医学者の身体運動論	単	1978. 3	北海道大学教育学部紀要 第30号
Leisure and Play Activities of Farmers in Edo Era	単	1978. 10	国際スポーツ史 東京セミナー報告書
徳川幕府法令における遊戯統制	単	1980. 9	北海道大学教育学部紀要 第35号
北海道における小学校運動会の成立に ついて～松前郡内小学校を事例として	単	1983. 3	『北海道体育学研究』 第18巻
写真が証明する体育授業の歴史（日本）	単	1983. 11	学校体育第36巻14号
近代学校制度の成立と身体教育	単	1984. 3	北海道大学教育学部紀要 第44号
高等教育機関における体育・スポーツの 発達に関する比較史的研究	共	1985. 6	『体育史研究』第2号
シリーズ戦時統制・スポーツの 統制について	共	1985. 8	婦人通信 第33号

旧制高等学校における応援団の組織化	共	1986. 8	体育史研究会誌 17号
岩倉使節団の欧米教育視察 「文部省理事功程」と諸外国の体育 (1)	共	1986. 9	『体育の科学』第36巻 9号
岩倉使節団の教育視察と諸外国の体育	共	1986. 12	『体育の科学』第36巻 12号
体育セミナー講義・体育史	共	1986. 12	学術図書
旧制高等学校におけるスポーツの成立 と発展過程に関する実証研究	共	1987. 3	『北海道体育学研究』 第20巻
教育と研究の少括	共	1988. 10	北海道大学教育学部年報 1号
教育家と衛生家との衝突～「学校衛生 顧問会」と武術の学校正課編入問題 公開講座「水泳」の指導について	単	1990. 3	北海道大学教育学部紀要 第54号
	単	1990. 10	北大体育指導センター 報第2号
大学保健体育問題の今後に向けて	単	1991. 6	大学体育第36号
1930年代と体育・スポーツ	単	1992. 6	『女子体育』第29巻
明治期中学校におけるスポーツの興隆 ～函館中学校校友会とスポーツ活動	単	1993. 8	『北海道体育学研究』 第28巻
健康体育教育について	単	1996. 3	『北大高等教育ジャー ナル』第1号
札幌農学校におけるマサチューセッツ 農科大学方式の体育の受容	単	1996. 9	マサチューセッツ州立 大学ボストン校看護学部 会報 (1996)
1880年の函館帆船レース	単	1997. 3	『スポーツ史研究』第10号
運動会の歴史・社会と学校の中を探る	単	1997. 5	『たのしい体育・ スポーツ』第83号
札幌農学校遊戯会の成立過程	単	1998. 3	北海道大学教育学部紀要 第75号
札幌農学校の普通体操導入に関するペ ンハローの意見書	単	2001. 7	『北海道体育学研究』 第36巻
札幌農学校のミリタリー・ドリル	単	2003. 8	『体育史研究』第17号
戦後の札幌市における社会体育の変遷	単	2003. 8	『札幌の歴史』39号
近代学校における運動会の系譜	単	2003. 3	『筑波体育論叢』
北海道における小学校運動会の起源	単	2005. 3	北海道大学大学院教育学 研究科紀要 第89号
北海道における地域スポーツ組織の 成立と社会体育	単	2007. 3	大学院教育学研究科紀要 第101号